

すてきな大分を見つけ、伝えよう！

2026. 4. 27

1 月講話会『宇佐神宮 比売大神の謎に迫る』ご報告

皆さんこんにちは。新緑の美しい季節になりました。ご報告が遅くなりましたが、今年 1 月新春早々の講話会は、国東半島古代史研究家の櫻木祐宏（まさひろ）先生をお迎えいたしまして『宇佐神宮に眠る謎の比売大神の正体を探る～国東半島に残る痕跡～』についてお話を伺いました。



宇佐神宮は、全国 4 万社を超える八幡社の総本社として鎮座し、丁度昨年は、鎮座 1300 年を迎えました。その宇佐神宮の御祭神の一つ**比売大神**については、今日まであまり詳しいことは伝えられていません。関係者に尋ねても「比売大神は宗像三女神ですよ」とまでの説明がありますが、そこから先は今一つはっきりしません。また「比売大神は卑弥呼では」との説も依然として根強いものがあります。つまりご祭神の比売大神については、今日まで謎とされて来ているのです。

講師の**櫻木先生**は、**国東半島の生れで、宇佐神宮とも関りの深い和氣清麻呂五男の家系**とされており、これまで宇佐神宮については、人一倍強い関心を持たれ自らの足で調べてこられました。

この度の講話は、これまでの関係する神社を隈なく歩き、綿密に調べていく中から明らかとなった内容です。講話の後のことですが、聴講者の一人から「予想を超える興味深い新たな知識を十分満足させられ引付けられる内容でした」とその感動をお手紙くださいました。

今回はその要旨をご報告いたします。

1. 宇佐神宮の謎「一の御殿」が中央でなく何故左側にあるのか

宇佐神宮の参道から本宮に上がると横に長い御殿があり、その中に三カ所の拝所（御殿）があります。手前から一の御殿・応神天皇、二の御殿・比売大神、三の御殿・神功皇后となっており、参詣の順番は一の御殿からでも中央の二の御殿からでもよいとの案内があります。普通中央の座が一の御殿と呼ばれるのではと思いますが、左側が一の御殿となり応神天皇が祭られ、中央は、二の御殿と呼ばれ比売大神が位置しています。何故一の御殿の応神天皇が中央に位置しないのかは素朴に感じる疑問です。



このことから比売大神は、応神天皇や神功皇后よりも重要な高貴な存在であることは想定できます。その比売大神とは一体誰を指すのかは重要です。

2. 比売大神とは誰を指すのか

(1) 宇佐神宮の由緒記

宇佐神宮二の御殿に祭られる**比売大神**は、『宇佐神宮由緒記』（宇佐神宮庁発行）によると三女神を意味し、この三女神とは、^{いちましまひめ}市杵島姫命・^{たぎりひめ}多岐理姫命・^{たぎつひめ}田岐津姫命であることが明らかにされています。

またこの三女神は、古事記や日本書紀にも登場しています。これによると^{あまてらすおおみかみ}天照大御神と^{すまののおのみこと}須佐之男命

がウケヒ（占い）を行い、この時に天照大御神より生まれたのが三女神であり、それは多紀理毘賣命、市杵島毘賣命、多岐津毘賣命であったと記されています。

(2) 安心院の妻垣神社の由緒

一方、宇佐神宮二の御殿の元宮の安心院の妻垣神社の由緒書には、「比売大神は神武天皇の母君である玉依姫で、安心院が御在所であった」と宇佐神宮とは異なる極めて重要な内容が記されています。つまり、比売大神は、玉依姫であり、玉依姫は、安心院にお住まいになられていたという非常に重要な言い伝えが残されているのです。

(3) 三女神の一人 市杵島姫 の「市杵島」とはどこか

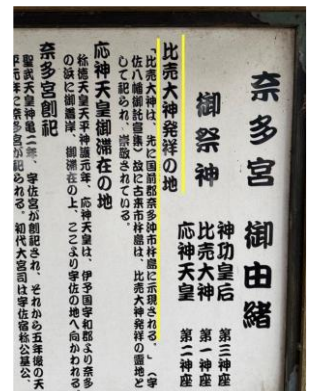
「市杵島」と名の付く島をグーグルマップでその所在地を確認すると全国広しといえども実は、唯一国東半島の八幡奈多宮沖に浮かぶ岩礁の市杵島しか存在していないということが分かります。

古事記、日本書紀にも出現する市杵島姫の「市杵島」とは、杵築市に所在の奈多宮沖にある市杵島を指しているということで、実に驚くことです。*古事記には、市寸島（いちきしま）と表記。

この重要な指摘は、国東在住の古代史研究家の坂本洸（きよし）氏が先ず提唱され、講師櫻木先生もこの説を強く支持されています。その市杵島の所在する奈多宮の由緒書（写真）は重要です。

(4) 奈多宮由緒書にみる指摘

由緒書には、奈多宮は、「比売大神発祥の地」であることを示し、「比売大神は先に国前郷奈多沖に示現される」（宇佐八幡御託宣集）と、驚くことに宇佐神宮よりも先に奈多宮沖の市杵島に比売大神は現れたことが示されているのです。



《宇佐神宮・妻垣神社・奈多宮の由緒書から総合的にわかること》

「比売大神は、三女神」（宇佐神宮由緒記）であり、また「比売大神は、神武天皇の母君玉依姫」（妻垣神社由緒）であったことから、三女神は、神武天皇の母君玉依姫であったということがわかります。

つまり宇佐神宮の比売大神である玉依姫（神武天皇の母君）は、「先に国前郷奈多沖に現われ、その後宇佐に移られた」ということがわかります。

6年に一度の行幸会の重要な祭事では、宇佐神宮の古い御神体は奈多宮に移され、これを「ご還幸=お里帰り」と呼ぶことも奈多宮が比売大神発祥の地であることを示しています。それでは、どうやって神武天皇の母君玉依姫は奈多宮沖に現れたのでしょうか？

3. 神武東征に同行か 神武天皇の母君（比売大神＝玉依姫）

神武天皇（即位前は正式にはイワレヒコ）の母君が、市杵島に現れたということは、神武天皇の東征と重要な関りがあったとみるのが自然な見方です。つまり神武天皇の母君玉依姫は、神武東征の時に同行していたということです。“玉依姫”という名前から、玉＝霊（たま）で、玉依姫の役割は、神武東

征の際に航海安全や東征の成功を祈る霊媒師としての極めて重要な役割があったことが考えられます。

未知の世界への航海であり、抵抗勢力も予想される緊張感に包まれた状況の中で、イワレヒコにとってこの霊媒師役の玉依姫の存在は欠くべからざる頼りとする存在であったことは想像できます。また、玉依姫にとっても息子のイワレヒコの東征成功のため必死な思いでその役目を果たしたと考えられます。

ところが、神武東征時に玉依姫が同行したという記録は、何故か記紀（古事記・日本書紀）にはないのです。しかし近年になり九州から瀬戸内海周辺の神社伝承を細かく追って、玉依姫が明らかに同行したという夥しい伝承が残っていることを明らかにした伝承考古学者（崎元正教氏）が現れています。

(1)玉依姫は、どのように市杵島に現れたのか

それでは玉依姫は、どのようにして市杵島に出現したのでしょうか。

神武東征の時、神武天皇に同行した母君玉依姫は、宮崎の日向より船で豊後の海岸を沿岸伝いに北上し、佐賀関からは別府、日出、杵築と沿岸部に沿いながら通過したと考えられます。奈多沖を通るときに、恐らく濃霧で視界不良となり市杵島の岩礁のところで船が座礁したと考えられます。この地域は今も濃霧が発生しやすく不自然な想定ではありません。このため玉依姫は岩礁の上に降りて、海岸に上陸したと考えられるのです。（当日の参席者より地元には岩にぶつかって困っている人を助けたという古い伝承があるとの証言がありました）



市杵島

玉依姫の立たれた岩は今、聖地とされ、現在鳥居が立っています。また、上陸した海岸にも鳥居が設けられ海岸から松林の中を通り抜けると楼門があり奈多宮の本殿が現われます。比売大神の別称「市杵島姫」のイチキは、玉依姫の役割が斎（イツキ：祭事を執り行う）のことであり、重要な巫女（みこ）の役割を果たすことからイチキノシマとして市杵島の字が当てられたと考えられます。また巖かな島（=巖島）の意味もあると思われま

(2)三女神の名前の由来は、豊後(新説)

比売大神である三女神の名前は、不思議な名前です。実は別府から奈多までの区間を移動する道程で名づけられたとみられ、途中の道程にある神社の祭神でそれを裏付けることができます。

^{たぎつひめ} 多岐津比売 別府鉄輪地区に停泊時に、温泉の沸る様子から玉依姫に多岐津比売の別名付けられた。 次の中継地日出の八津島神社では、多岐津比売が単独で示現しています。

^{たぎりひめ} 多紀理毘売 次の中継地杵築市大内の山神社で濃霧の中で苦勞したことから名付けられた。

ここでは多岐津比売に多紀理毘売が加わりますが、何故か二女神だけ祀られています。

^{いちきしまひめ} 市杵島比売 濃霧の中を航行し、奈多沖の岩礁（=市杵島）に座礁し、岩の上に降り立ち

3つ目の別名 市杵島比売 の名がついて、ここで三女神の名前が揃ったのです。

この説は、古代史研究家の坂本洌（きよし）氏が地元で発表しており、櫻木講師は、関係する神社を自らの足で調べ三女神が名付けられた順番とその状況証拠を裏付けたのでした。

三女神は、これによりタギツヒメ（温泉）⇒タギリヒメ（濃霧）⇒イチキシマヒメ（岩礁）の順番に示現したことがわかります。また三女神は、一体で比売大神のことであり、これはまた玉依姫の別名であるということなのでした。

(3)宗像三女神との関係

三女神となりますと宗像三女神との関係はどのようになるのかが気になるところです。

それは、比売大神発祥の地である奈多八幡を起点に宇佐八幡に至り、その後宗像大社に三女神として遷座されていったと見られます。

その遷座の経路は、福岡県飯塚市厳島神社や鞍手郡六嶽神社更に福津市神輿神社の由緒により明らかになっています。



三神像（国重文化財）奈多宮

特に3世紀以降、韓半島との交流が頻繁となりこれに伴う航海の安全や大陸からの侵入に備える守りが非常に重要となり、玄海灘に面し半島との中継地点となる宗像ルートに、昔神武東征というビッグプロジェクトに同行し航海の安全と東征を成功に導いた玉依姫=比売大神をその護り神として宗像三箇所に配祀するために、三女神に宇佐からご遷座願ったということです。宗像に行かれた後に宗像三女神になったと思われます。

(4)玉依姫の神武東征同行が何故消されたのか

玉依姫は、卑弥呼であった可能性

玉依姫は、霊媒師であり巫女（みこ）の役割をされていました。『魏志倭人伝』に“鬼道をよくする女王”として描かれている卑弥呼は、霊媒師であり比売巫女（ひめみこ）でありました。ひめみこは、聞き間違えると“ヒミコ”となります。あるいは日巫女（ひみこ）だったかもしれません。いずれにしても高貴な姫で巫女でもあった玉依姫が、卑弥呼であった可能性がかなり高いということです。

『魏志倭人伝』に登場の卑弥呼が魏に朝貢したとされる年代が西暦239年であるとみられています。若し卑弥呼が神武天皇の母君の玉依姫であることが明らかになれば、日本建国は、西暦200年頃となります。しかしこれでは記紀で記した紀元前660年建国との整合性が取れなくなるのです。

従って、この問題を認知した当時の政府は「玉依姫が卑弥呼である」と推定される記述、また「神武東征に母君玉依姫が同行した」ことの痕跡、更には卑弥呼と比売大神、玉依姫は同一人物あるという痕跡、御祭神としての玉依姫は、抹消しなければならないという事情に置かれたのでした。

これが、記紀に神武東征で国東半島経由のところは全く抜け、更にはその間の痕跡が厳島社や弁天社等の名前に置き換えられた理由であったとみられるのです。

(補足) 伝承考古学 崎元正教氏の説 神武天皇の治世の始まりはAD207年頃か

初代神武天皇から41代持統天皇までの平均在位期間を検証しますと第17代履中天皇以前と以降では明らかに在位期間が異なります。履中天皇以前は、平均67.4年/代であるのに対して、以降は平均12.3年となっており大きな隔りがあることから、履中以降の平均在位期間12.3年を履中以前に適用すると、初代の年代は、西暦207年になるとみるものです。卑弥呼の生存した年代に近いのです。

4. 痕跡を辿る 国東半島内に残る夥しい数の厳島神社

創建不詳の古い厳島神社（弁天社含む）が、このように濃い密度で残る地域は他にありません。また、奈多八幡から北部は、その神社のご祭神は、市杵島姫の名前が主流になっている特徴があります。厳島（イツシマ）＝市杵島（イケシマ）で、これは、国東半島に市杵島姫即ち神武天皇の母君玉依姫が、長期間滞在したことを示します。櫻八幡神社資料（国東町史）には「比売大神（玉依姫命）示現し、国前に住む」とまで記録されているのです。



国東半島：厳島社の所在状況

国東半島に長期間滞在した最大の理由は、特に鉄製武器を調達する必要があったことが考えられるのです。国東半島は、砂鉄が豊富に存在し、安岐、武蔵、国東、富来等、木炭を使用する低温精錬法による製鉄の遺構や残滓が多数発見されています。

5. 玉依姫の痕跡を隠したい中央と、それに抗う地元の信仰

西暦 720 年頃に記紀編纂がなり、比売大神＝玉依姫に関する箝口令、三女神への誘導が主流となっていきます。これにより、玉依姫を直接に祭れなくなり、「比売大神は、宗像三女神で通す」ことになっていきました。

これに対して記紀選者の意地、地元信仰心の抵抗から夥しい数の厳島神社が存在するようになったとみることができます。また、表看板をいっそ八幡様にして堂々と三女神（玉依姫）を祭るという方法やカモフラージュする方法などがとられてきたことが分かります。

日吉神社、加茂神社、粟嶋神社のように近親者を祭り、神社の看板を挿げ替え玉依姫の名前で祭る方法や市杵島姫を祭る厳島神社を建てて玉依姫を出さないけれども神社の伝承、言い伝えて史実を残す等工夫を凝らし史実を残そうとした地元の赤心と素朴な信仰心が伝わります。

6. まとめ

以上櫻木講師のお話を要約しますと次のような内容となり、その内容は国東半島古代史への眼（まなこ）を開かせてくださる中身あるものでした。

- ①宇佐神宮の比売大神は、宗像三女神であり、実は、神武天皇の母君玉依姫であること。
- ②玉依姫は、神武天皇の東征で同行されたこと。
- ③玉依姫は、奈多八幡沖の市杵島に比売大神として示現され、これが比売大神の発祥とされること。
- ④宗像三女神の名前は、国東半島南部の移動過程で付けられ、名前には付けられた順番があること。
- ⑤玉依姫は、宇佐に到着する前に国東半島の沿岸部や内陸部へ滞在し、長期間滞在されたこと。
それは、東征に必要な鉄製品（鉄製武器）の調達が主な目的であったこと。
- ⑥国東半島に夥しい創建不詳の厳島神社、弁天社等の存在は玉依姫の滞在を物語るものであること。

⑦玉依姫は卑弥呼であった可能性が高く、これは記紀の建国の記載に支障となり、歴史から消された。

(文責 青井勝久)

